

〈公募論文〉

カントにおける自己認識論

——自己意識論との連関から——

尾崎 賛美

はじめに

本稿は、『純粹理性批判』(以下、*KrV*と略記)¹における(理論的・経験的)自己認識 *Selbsterkenntnis* の問題について、自己意識 *Selbstbewußtsein* の議論との連関から考察する。後述するが、カントは両概念を明確に区別する。周知の通り、自己意識については *KrV* における「純粹悟性概念の演繹について」(以下、「演繹論」と略記)をはじめ、「統覚 *Apperzeption*」との連関において広範に論じられる。他方、自己認識の議論は主に B 版「演繹論」で登場するが、その内実は極めて不分明である。その要因の一つは、カント自身が自己認識について多くを語らない点にあるが、それ以上に問題なのは、カントの立場に忠実であろうとするほど、自己認識について論じることの困難さに直面せざるを得ない点にある。自己認識も経験的認識である以上、そのあり方は現象としての自己 *Selbst* を認識することであり、この点はカントも繰り返し強調する。しかし肝心の問題、すなわち〈自己が現象するとはいかなることであるのか〉については、十分な説明がされていない。そもそもカントにおける自我 *das Ich* は、ペンや机といった意味での経験的対象としては想定されない以上、当の自我が、現象する自己として、認識の対象となるということも想定され得ないのではないか。こうした自己認識に内在する困難さはさらに、〈そもそも自己意識において意識の対象とされる自己とは何か〉という問いを引き起こす。

私見では、自己意識における自己の内実を明らかにしなければ、自己認識の内実は究明されず、また自己認識の内実も自己意識との連関から明らかにされなければならない。というのも、自己意識と自己認識がともに自己を対象とする意識の事柄であるならば、両者は何らかの仕方でも連関するはずであり、両者の相違は保持されるべきである一方、それらの連関構造もまた明らかにされるべきだからである。管見の限り、カントの自己認識論に内在する上述の困難さは看過されるきらいがある。数少ない例外として、「演繹論」に関する Allison (2015, cf. pp. 388-406) の詳細な分析や、カントの自己認識論を主題とする Forgiione (2019)、Kraus (2020) の研究があるが、All-

1 カントの著作からの引用や参照は、アカデミー版カント全集 (Kant, Immanuel (1900ff.), *Kant's Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften) に依拠する。引用や参照に際しては、アカデミー版の巻数 (略記号 Ak. + ローマ数字) に頁数 (算用数字) を添えて示す。ただし『純粹理性批判』からの引用については、慣例に従い「第一版」(1781) を A、「第二版」(1787) を B と表記する。カントの著作を含め、引用文への傍点は原著者による強調であり、地の文への傍点は筆者による強調である。また特に断りが無い限り、引用文における [] による挿入と [] による中略とは引用者による。なお、先行研究からの引用の際には著者名と頁数を示す。

ison は自己認識の内実を掘り下げて検討しておらず、Forgione は本稿が主題とする問題に積極的に取り組んでいるものの(Forgione, pp. 177-197)、上の連関構造を包含する自己認識論解釈は提示しない。「魂という超越論的理念」(Kraus, p. 170)を自己認識論解釈の手がかりとする Kraus の研究は、実践的文脈をも包括する広範な議論を展開する一方、理論的自己認識そのものの直接的な究明はしていない。

こうした点を踏まえ、本稿前半では自己意識の問題に焦点を当て、カントにおける自我および自己の内実を検討する。その際、我々が自己意識という概念に対して普段いただくイメージと、カントにおける自己意識との相違を明確にすることが重要となる。自己認識の問題を扱う本稿後半では、現象として認識される自己とは何かという問題を主題化し、カントにおいて自己認識という事態がいかなることであるのかを、自己意識の内実との連関から明らかにする。

第1節 カントにおける自己意識

(1)問題の所在：自我 das Ich と自己 Selbst

「自己意識」とはいかなる意識であるか。自己意識において想定される「自己」とは、あるいはそれ以前に、そもそも「自己」自身を意識する当の「自我」とは何か。

第一に、カントは「自我」を、「なんらかの対象についての直観でもなければ概念でもなく」(A382)、「内容のまったく空虚な表象にはかならない」(A346/ B404)と言い、『プロレゴメナ』では、たんなる「指標辞 Bezeichnung」(Ak. IV. 334)にすぎないとさえ言う。こうした「自我」の位置づけは、「自我」という概念に対応する内容(実質)が、直観において与えられない点に由来する(vgl. B135, B278, A355, A381, usw.)。それゆえ「自我」は何らか具体的な事物を指示する概念ではなく、したがって「自我」そのものを経験的な認識の対象として想定することはできない。

第二に、カントは「自我」を「統覚」概念との連関でしばしば論じており、ときには両概念を互換可能なものとして扱っているかのような印象さえ与える(vgl. A400, B407)。ここで、この両概念の関係を掘り下げて検討することはしないが、B版「演繹論」§16の冒頭にて、「私は考える Ich denke」が「統覚」の「自発性の作用」を表す思惟の働きとして示される点に着目し(B132)、本稿では当面、この「私は考える」における「私」に相当するものとして「自我」概念を解釈する²。

ただし第一の点で触れたように、「自我」概念がそもそも具体的な指示対象をもたない空虚な表象である以上、「私は考える」における「私」においても特定の個人が想定されるわけではない。ここにおける「私」とは、Rosefeldt が指摘する通り、「私は考える」という「思考の形式」において、必然的にその「主語の位置 Subjektstelle」(Rosefeldt, S. 440)において使用されなければならない概念にすぎず(vgl. B411 Anm.)、この意味において「私」は、あくまでも判断の際の「論理的主体(主語)logisches Subjekt」であり、「実在的主体(主語)reales Subjekt」とはみなされない(vgl.

2 この「私は考える」が「統覚」の働きと即座に同一視され得るのか、あるいは前者は後者をたんに言表化したものにすぎないのか、という問題については、たとえばAllison (p.337)やLonguenesse (pp. 104ff.)を参照。当面筆者は、「私は考える」は、「統覚」が「自発性の作用」として実際に機能するその働きを言表するものであり、「私は考える」と「統覚」とは即座に同一視されることはないとしても、同一の働きを指示するものであると解釈する。

A350)。

したがって、「自我」が空虚な概念にすぎず、あくまでも思惟の形式における論理的な主語にすぎない以上、「自我」という概念において何らかの事物的な意味での対象が想定されることはなく、ましてや合理的心理学のように、実体的靈魂としての自我が想定されるわけでもない。自我がこうした概念であるとすれば、「自己」という概念もまた、それが指す具体的な内実を欠くように思われる。すると、カントにおいて自己を意識するとは何を意識することなのか。

(2)「私は考える Ich denke」と「私(自身)を考える Ich denke mich (selbst)」

自己意識という概念に関する一般的なイメージのひとつとして、自己自身にまつわる様々な事柄を思い浮かべることが挙げられるだろう(以下では、このような意味での自己意識を、我々が普段イメージする自己意識の一例として扱う)。しかし、カントにおける「自己意識」概念は、こうしたイメージのもとで理解される「自己意識」とは異なる。この差異を明確にすべく本稿は、我々が普段イメージする自己意識(「私(自身)を考える／意識する」こと)と、カントにおける統覚としての自己意識(「私は考える」)とを区別する³。結論から言えば、カントにおける自己意識とは、その対象としての自己を前提するような反省意識ではなく⁴、あくまでも「私は存在する」という意識、すなわち「存在意識」にすぎない。この点を踏まえ、まずは統覚(自己意識)の働きを言表するところの「私は考える」について、有名な箇所を一瞥しよう。

私は考えるということ Das: Ich denke、このことは私のいっさいの諸表象に伴い得るのでなければならぬ。(B131)

同様のことが直後でも、統覚すなわち自己意識はいっさいの諸表象に伴い得なければならぬとして示される(vgl. B132)。これは何を意味するのか。仮にここで、「自己意識」を上述の日常的な意味に解するならば、諸表象に自己意識が伴うということは、たとえば「私は(自分が)あの建物を見ている、と私自身を考える」という、いわばメタ的な視点から自らを反省する、自己言及の事柄となるだろう。しかし、我々は常にこうした自己言及的な意識構造のなかで対象を認識しているだろうか。つまり、たとえ諸表象への自己意識の随伴(の可能性)を認めたとしても、対象認識に際し我々の意識は、自己自身ではなく、あくまでも当の事物に向けられているのではない⁵。私見では、こうしたいわば自己反省的な意識のあり方は、カントの想定する自己意識ではない⁶。論点を先取りすれば、カントにおける自己意識とは、自己反省的な構造をもたない、非

3 たとえばLonguenesseは、カントにおける自己意識を三つの観点から、すなわち、①「私は考える、という純粋に知性的な意識」、②「純粋な思考作用についての未規定的な知覚」、③「規定された知覚、すなわち経験としての私の思考作用についての意識」に分類して説明する(Longuenesse, pp.86ff.)。筆者もこうした分類に概ね賛同する。本稿の議論に置き直せば、①は統覚の自発性の作用に、②はその作用を通じて生じる「私は存在する」という意識に、③は本稿が次節で扱う「(経験的な)自己認識」に分類される。

4 この点はMakkreelも「統覚的な自己意識apperceptive self-consciousnessのそなえる機能は、内的感官において与えられた事柄を内省することにあるのではない」と指摘する(Makkreel, p. 27)。

5 Longuenesseも、「私は考えるI think」という命題形式で何かを言明するとき(たとえば、“I think this is a tree”), 私の注意は私自身に向けられているのではなく、あくまでも外部の事物(tree)に向けられている、と指摘する(cf. Longuenesse, pp. 26f.)。

明示的な存在意識である。この点を明らかにするために、「私は考える」と言表される統覚(自己意識)の働きそのものに目を向けよう。

(3) 存在意識としての自己意識

紙幅の都合上ここではB版「演繹論」の議論に限定するが⁷、そこで示される統覚の働きは、「自己意識の超越論的統一」(B132)、あるいは「統覚の根源的で総合的な統一」(B135)に集約される。この働きの要点を示せばそれは、直観において与えられた経験的認識の素材(諸表象の多様)を取りまとめ、それをひとつの意識のもとに帰属させる働きである。これにより、諸表象は当の経験主観との意識的連関を有した「私の表象」として、意識的に統一された「私の経験」を構成する(vgl. B132ff.)。本稿において重要な点は、諸表象と連関するこの意識こそ、先述した存在意識であるということであり、結論から言えば、これがカントにおける「自己意識」の内実である。

統覚の総合的で根源的な統一において、私〔経験主観〕は私自身を[……] 私は存在する ich bin としてのみ意識するにすぎない。(B157、下線による強調は筆者)

[……]私[・]は[・]存在[・]する[・]という表象は、いっさいの思考作用に伴い得る意識を表しており、主観の現実存在をそれ自身の内に直接的に含んでいる。(B277)

ここに、統覚の働きと自己意識(「私は考える」)、および存在意識との連関が看取される。諸表象に「私は考える」という自己意識が伴う際、そこには「私は存在する」という意識が含まれる。この随伴作用を通じて、諸表象と「私は考える」における「私」、つまり認識主観との意識的な連関が形成されるが、これはつまり、当の統一作用を通じて生じる存在意識との連関が諸表象に付与されるということである。

しかし上で見たように、「私は考える」における「私」、すなわち「自我」は内容を欠いた論理的な主語にすぎず、「私は考える」もそもそもは、「たんなる論理的機能」にすぎない(vgl. B429)。それにもかかわらず、カントは同時に、「統覚は実在的な何か *etwas reales*」(B419)であるとも主張する。一見矛盾するようにも思われるこの主張は、「私は考える」が現に認識を構成する思考作用として働く際、この働きが現に存在し、その存在が意識される点に着目すれば筋が通る。我々が実際に経験的認識を遂行するのであれば、それを可能にする統覚の働きも、たんに論理的に想定された機能であるのみならず、現に機能する働きとしてもみなされるべきであろう。そしてこ

6 このような自己反省的な意識構造は、Allisonの表現を援用すれば、「second-order」な自己意識である。それに対しカントの主張する自己意識は、Allisonが正当にも指摘する通り、「first-order」な自己意識として解釈されるべきである(cf. Allison, pp. 340f.)。他方、こうした自己反省的な意識は、自己自身について経験的に考えること(自己認識)の契機として重要な役割をもつ。ただし、自己自身について考えるという事態も、「私は考える」という思考作用に基づき遂行されねばならないという点は、自己認識の議論において留意されるべき点である。

7 A版「演繹論」とB版「演繹論」とでは、たしかにその議論構造において相違が見られるものの、私見ではこうした変更はカントの主張の根本的な変化を意味するものではない。Longuenesseも同様の指摘を、両版のテキストを対比させつつ示している(cf. Longuenesse, pp. 78-81)。

の働きの中で、私は私自身を、現象としてでも、物自体としてでもなく (vgl. B157, B422 Anm.)、ただ「存在する」としてのみ意識する。ここに統覚が「実在的な何か」として論じられる局面がある。もちろんここに明示的な自己反省の構造を想定する必要はない。むしろ思考作用と存在意識とはひとつであり、思考作用が現に働くのであれば、この存在意識も思考の働きの内にすでに含まれている⁸。

このように、外界から諸表象がもたらされることを契機に現に機能する自発性の作用という側面から検討すれば、「私は考える」は思惟の働きを言表する論理的命題であるのみならず、「私は思考しつつ現実存在する *ich existiere denkend*」として表される「経験的命題」という位置づけを得る (vgl. B422 Anm., B428f.)⁹。ただし留意すべきは、この「現実存在」が「いかなるカテゴリーでもない」点、またこの「経験的命題」を通じて示される存在意識が「未規定的な知覚 *unbestimmte Wahrnehmung*」¹⁰にすぎないとされる点である (B422 Anm.)。Longuenesse も指摘する通り、「これは現実存在というカテゴリーの適用事例ではなく、むしろ、現実存在の直接的かつ前—カテゴリー的な知覚 *immediate, pre-categorical perception of existence* である[…]

 (Longuenesse, p. 90)¹¹。それゆえ、「私は現実存在する」という命題を通じても、個別具体的な主観についての経験的な認識が得られるわけではない (vgl. B277)¹²。むしろこの意識は Frank の見立て通り、「前反省的な知 *vorreflexive Kenntnis*」 (Frank, S. 192) であり、ここに自己自身を反省する契機は見込まれない。こうした観点より筆者は、カントにおける「自己意識」を、自己自身への明示的な反省構造をとらない、いわば非明示的な自己意識、より厳密には存在意識として解釈する¹³。

(4) 意識作用としての「自我」と存在意識としての「自己」

以上を踏まえ、カントにおける「自我」および「自己」概念の内実を検討しよう。再三指摘した通

-
- 8 B版「演繹論」のある註でも、「私の現存在」は「私は考えるということによってすでに与えられている」とされる (vgl. B157 Anm.)。
- 9 この点については Forgione も「経験的な観点からすれば、〈私は考える〉と〈私は思考しつつ現実存在する〉とは同等である。そこにはもはや論理的な機能はなく、存在 *existence* のレベルでの主観に関する規定があるのみである」 (Forgione, p. 61) と指摘しており、Melnick も、「〈私は考える〉とは、何ら抽象的なものではなく、実在的かつ具体的なものなのである」 (Melnick, p. 9) と解釈する。ただし、カントにおいて、「私は思考しつつ現実存在する」という命題における存在意識が「未規定的な知覚」とされているにもかかわらず、そこに「存在のレベルでの主観に関する規定がある」と Forgione が主張する点、またこの命題を「具体的なものである」と Melnick が評価する点については今後の検討課題としたい。
- 10 この「未規定的な知覚」について Crone は「前反省的 *prä-reflexiv* な心的状態」として解釈し、こうした「最小限度の感覚」における自己意識は、より正確には「自己自身が現前している *gegenwärtig*」ことの意識であるとする (Crone, S. 161)。
- 11 Forgione も同様の解釈の立場を採る。Cf. Forgione, p. 61。
- 12 この点に関し、Crone による次の指摘は極めて的確である。「私が何かを考えたり、表象したり等々するとき、私は自らに対したしかに現前しているが、その際私は、空間—時間的に現実存在する具体的な個人としての自分自身についていかなる表象ももたない。」 (Crone, S. 160.)
- 13 同様の観点から、たとえば Choi は「私の根源的な現存在の意識」 (Choi, S. 42) と、また Heimsoeth は「自我そのものの現存在の、そして働きの意識 *Daseins- und Handeln bewußtsein des Ich an sich*」 (Heimsoeth, S. 241) と解釈する。

り、自我はあくまでも空虚な概念にすぎないが、それでも現に働く統覚の作用という観点からすれば、それは思考作用というあり方において存在する。それゆえ筆者は Melnick とともに、カントにおける自我の内実を活動性として解釈する¹⁴。もちろん、こうした解釈を「フィヒテ的」なものとする立場 (Forgione, p. 51) もあり¹⁵、Longuenesse にいたっては Melnick の立場を明確に斥ける (cf. Longuenesse, p. 107)。他方、当の Longuenesse の所見では、「〈私[自我]〉 I とは、自身の思考(総合)活動を意識することにより、自らを意識するところの存在[者] entity を表し (ibid.)、「この存在[者]は、[思考の]活動そのものというよりも、活動の(未知なる)主観あるいは遂行者 agent である」(Longuenesse, p. 108)。たしかに本稿でも、自我を「私は考える」における「私」と位置づけ、その限りにおいて論理的な主語としてみなした。しかし、自我がこのように想定されるのは、あくまでもその論理上の役割においてであり、このことに基づき自我が何らかの「存在[者]」として積極的に規定されるわけではない¹⁶。むしろ自我(より厳密には統覚)に対し、その存在を主張し得るのは、統覚が現に働く限りにおいてであるが、そこにおいて生じるのはたんなる「存在する」という意識以外の何ものでもなく、それ以上の規定をこの意識に見込むことはできない。それは『プロレゴメナ』においてカントが自我を「現存在の感情 Gefühl eines Daseins 以外の何ものでもない」(Ak. IV. 334 Anm.)とみなす通りである¹⁷。しかし、自我を「現存在の感情」ないし「存在意識」として解釈し得るのは、同時に自我を活動性として解釈する限りにおいてである。なぜなら、自我が現に働く活動性であるがゆえに、自我はまた存在意識としても解釈され得るからである¹⁸。

では、自己意識における「自己」とは何か。たとえば A 版「演繹論」で、内的感官における内的諸現象の流れの内には、いかなる「絶えず存立し続ける自己 stehendes oder bleibendes Selbst」もあり得ないと明言される通り (A107)、カントにとって自己は、我々の意識の内において静止的に捉えられる対象としては位置づけられていない。加えて、上述の通り、カントにおける自己意識は自己反省的な構造をそなえない、いわば主客未分な意識であり、この点からしてもカントにおける自己は、反省的な自己意識の遂行の果てに捉えられる対象としては想定されない。Heidemann が指摘する通り、カントにおける自己意識は「遂行意識としての自己意識 Selbstbewußtsein als Vollzugsbewußtsein」(Heidemann, S. 196)にすぎないのである。ただし、こうした自己意識にあえて「自我」と「自己」との概念上の区別を設けるならば、第一に「自我」は活動であり、自己意識の作用という側面として解釈される。それゆえ「自我」そのものは、いかなる仕方に

14 Melnick は「思惟する主観あるいは自我」を「知的作用 intellectual action」(p. vii)として捉え、「私[自我]はこの自己-活動のうちに、あるいはこの自己-活動として存在する」(p. 5)と解釈する。

15 ただし、Forgione 自身も「現実存在する主観としての自我とは、その思考[作用] thinking である。したがって、思考とは、存在そのものである」(Forgione, p. 63)と指摘しており、Melnick の立場を全面的に斥けているわけではない。

16 ただし、この Longuenesse の見解がカント自身の記述(「たんなる私自身の意識において、私は存在[者]そのもの Wesen selbst である」、B430)に依拠している点は筆者も認めるところであり、ここでの争点はむしろ、この「存在」(あるいは存在者)をいかに解釈するかにある。

17 この記述そのものは Longuenesse 自身も踏まえており (cf. Longuenesse, p. 90)、また Forgione も最終的には本稿と同様の解釈を提示する (cf. Forgione, p. 187)。

18 この点において Forgione も、「主観としての(自我)、[すなわち]自己意識とは、存在そのもの the being itself である」(Forgione, p. 64)と指摘する。

においても捉えられる側にまわることはなく、あくまでも活動であり続ける。それに対し「自己」は、この活動が〈現に作用している〉という、当の働きの存在という側面から捉えられたものとして解釈できる。つまり自己意識の活動を通じて、その存在の意識が与えられるならば、あるいは自我が現存在の感情として捉えられるならば、それはすでに自我ではなく自己である。この存在意識、あるいは先に示した「未規定的な知覚」こそ、「自己」概念が指示する内実である。いずれにしても、この存在意識はいまだ個別具体的な自己ではなく、こうした自己を論じるには自己認識の議論へと移行しなければならない。

第2節 カントにおける(理論的・経験的)自己認識

(1)問題の所在

我々は普段、「自己認識」と「自己意識」とをどれほど明確に区別しているだろうか。「80年代の経験的自己認識に関するカントの思想にとって重要なのは、自己意識と自己認識との相違である」と Klemme が強調するように(Klemme, S. 215)、とりわけ B 版「演繹論」においてカントは、「自己自身を意識すること」と「自己自身を認識すること」とを明確に区別した(vgl. B157)。カントによる説明を煎じ詰めると、自己認識とは、内的感官の内に現象する自己を経験的に認識すること¹⁹であるが、本稿はこうした自己認識の内実を、「我々自身の現実存在の時間における規定」(B277)という観点から明らかにする²⁰。なぜなら、〈自己が現象する〉ということ、文字通り〈我々自身が自らに対し現象すること〉と解釈することはできないからである²¹。これはカントの自己認識論の解釈を試みるに際し直面せざるを得ない重大な問題である。まずはこの事情を確認しよう。

内的感官は、それによって心が自己自身を、あるいはその内的状態を直観するものであるが、しかし、魂そのものについてのいかなる直観をも客観として与えることはない。(A22/ B37)

内的感官は、我々自身をも、我々が自らに対し現象する通りにしか意識に描出せず[…。]。(B152f.)

19 Kant-Lexikonの「経験的自己認識」に関する規定(S. 2075, vgl. B156ff.)を参照。

20 カントの自己認識の問題に関する国内の研究として、中野(2021)を参照。中野は自己認識の対象である「現象としての自己」を、たとえば「私は昨日大学に行った」という判断において言及されるような「私」と解釈する(中野、173頁)。本稿も基本的にはカントにおける自己認識を、こうした〈経験的な自己言及の事態〉として解釈する。しかし、こうした結論を出すに先立ち、(本論で触れる通り)自己認識の対象であるところの「現象する自己」を〈我々自身が現象する事態〉として想定することはできない、という問題が解決されなければならない。中野もこの問題を明確に捉えていると思われるが(中野、177頁)、管見の限り中野の提示するカントの自己認識論解釈(中野、167-196頁)は、この問題への直接的な解決を与える仕方では展開されていない。それに対し本稿は、「主観の現実存在の時間における規定」という観点から考察し、上述の問題点を認めながらもなお、中野が示すような自己認識の事態が成立することを明らかにする。

21 我々の身体は外的認識の対象として示唆されていることから(vgl. A385, B415, Forgione, p. 184)、自らの身体の認識をカントにおける自己認識の内実と解釈することはできない。

いずれの引用も、内的感官において我々の内的状態が、さらに言えば現象としての我々自身が直観されることを示唆する。しかし、ひとつめの引用の後半の記述、すなわち内的感官において与えられる直観は、決して「魂そのもの」の直観ではないという点が重要である。また、「内的直観においては外的感官の諸表象が我々の心を占める本来の素材を成す」(B67, vgl. B XXXIX Anm.)とされることから、自己認識を文字通り、我々自身の認識として解釈する見通しは立たなくなる。もとより、本稿の冒頭でも指摘した通り、カントにおける「自我」とは空虚な概念にすぎず、経験的に認識され得る対象を指示する概念ではないのであった。したがって、「内的感官において自己が現象する」と言われる際、そこで現象するのは文字通りの我々自身ではなく、あくまでも外界の諸表象である²²。以上を踏まえなお、自己認識という事態を想定するならばどうすればいいのか。

(2) 自己意識から自己認識へ：非明示的な自己意識と明示的な自己意識

当面の手がかりは、本稿が自己認識の内実として採用する、「我々自身の現実存在の時間における規定」にある。ここにおいて、前節までに示したふたつの論点が重要となる。ひとつは、「自己自身を考える／意識すること」は、(前反省的な存在意識としての自己意識からは区別されるものの)自己認識を遂行する上での決定的な契機となる点である。いまひとつは、上で「自己」の内実として示した存在意識こそが、「自己自身を意識する」に際し、当の意識が向かうところであり、自己認識という事態において規定されるべき「現実存在」であるという点である。まずは第一の点に関連する記述を引用しよう。

自己自身についての意識 *Bewußtsein seiner selbst* はいまだとうてい、自己自身についての認識ではない。(B158)

私自身についての認識には、意識ないし、私は私を考えるということ *daß ich mich denke* に加えなお、私は自らの内における多様の直観を必要とし、この多様の直観を通じて私はこの思考[私自身についての思考]を規定する。(B158)

通常我々が自らについて考えるときにはすでに、自らを規定する様々な内容をも同時に想起しているため、自己意識と自己認識との区別などほとんど気にも留めないが、カントはここに明確な差異を設ける。具体的な内容を伴わない仕方では自己について考えるということを追体験することは容易ではないが、ここまでの議論に則せば、これは自らについて考える際に生じる思考作用(の存在)そのものに意識を向ける事態である。こうした存在意識ないし「未規定的な知覚」こそ、「自己」の内実であった。それゆえ自己自身について考えることは必然的に反省的な構造をとるが、こうした「自己」は当の反省に先立ち前提されるのではない。むしろこの反省の遂行も「私は考える」に基づくことから、この反省を遂行する意識の働きを通じてはじめて、当の反省の向かう非明示的な存在意識(=自己)が与えられ、またこうした反省構造において意識が働くからこそ、こ

22 この点についてはSchmitzも明確に指摘している (cf. Schmitz, p. 1053)。なお、煩雑さを避けるため、以下でも「自己認識」という表現を使用するが、この自己が(我々自身ではなく)あくまでも我々との意識的連関を有した諸表象であることが特段留意されるべき場合には、適宜“自己”という表記を用いる。

の非明示的な存在意識は、明示的な対象として意識されるようになる。このような仕方ですらへ(明示的に)注意を向ける契機が、自己認識において重要となる。このように明示的に捉えられた「私は存在する」という意識が、さらに多様の直観で以て(「私はしかじかのよう^に存在する」のごとく)具体的に規定されるとき、カントが自己認識ということ想定する事態が成立する。

(3)現象する“自己”

では、件の存在意識は何によって規定されるのか、という点から確認しよう。

[...]私の現存在の経験的意識は、私の現実存在と結びついているところの、私の外部に存する何かとの関係を通じてのみ規定され得る。それゆえ、時間における私の現存在の意識は、私の外なる何かとの関係の意識とともに結びついている。(B XXXIX Anm.)

まず引用の前半部について。自己認識とは、私の現実存在が内的感官のうちで、その形式であるところの時間に則して規定されることであるが、すでに見た通り、内的感官にもたらされる素材のいっさいは外界に由来する。すると、自己認識の遂行において規定されるべき存在意識は、私の外部の諸事物との連関の内規定されることになる。次いで後半部にて示される「私の外なる何かとの関係の意識」についてであるが、この関係は、諸表象が「私の諸表象」となる際に付与される、主観の存在との意識的連関である。前節で確認した通り、こうした連関は諸表象に「私は考える」(「私は存在する」)が伴うことで可能となる。以上を踏まえると、私の現存在は、自己認識を遂行するところの当の主観と意識的連関をすでにもった(ないし、もちつつある)外界の事物の諸表象によって、その諸表象との関係の内具体的に規定されることになる²³。

上の引用(B158)で確認した通り、自己認識には、自己自身について考えることの他に、こうした思考を具体的に規定する多様の直観が必要であった。

私がこの現存在を規定すべき様式、換言すればこの現存在に属す多様なものを私の内において措定すべき *setzen* 様式は、未だこの[私は考えるという] ことによっては与えられていない。そのためには自己直観 *Selbstanschauung* が必要である[...]。(B157 Anm.)

私の現存在を規定するところの諸表象が措定されるとはいかなることか。関連する記述が「超越論的感性論のための一般的注解」(vgl. B66-69)にある。そこでは「心が自らの活動によって[...] [外的事物の諸表象と主観との] 諸関係の表象を措定すること *setzen* が、「[心が] 自らによって触発される」こととして説明される(B68)。先に、自らへと注意を向けるという契機が自己認識において重要であると示したが、こうした注意の働きは引き続き自らの存在を規定する多様を措定する働きに転じる。直後の箇所「自らを意識する能力」が言及される際も、それがさらに「心の

23 この点を踏まえれば、自己認識は過去および現在の時点における自己言及の事柄に限定されるべきであろう(つまり、いまだその素材が与えられていない、未来の出来事に関する予期は自己認識には数え入れられない)。この点において本稿は、自らの過去について判断を下すことを自己認識の「モデルケース」としながらも、「カントは現在時制や未来時制をとった判断をどこでも排除してはいないから、議論を過去に限定する原理的な必然性はない」とする中野の解釈と異なる(中野、212頁、および173-4頁)。

内に存するものを探し出す(把捉するapprehendieren)」ことにまで及ぶ旨が示されている(ebd.)。ここでの「把捉」とは、自身との意識的連関を有する外界の事物の諸表象を捉え出すことであり、これは主観が自己自身を触発すること(自己触発Selbstaffektion²⁴)で遂行される(ebd.)。こうした自己触発を通じ、自らを規定する多様を捉える一連の過程が先に示した自己直観であり、この過程を通じて“自己”が現象すると解釈できる。すでに引用した箇所になるが、今度は少々詳しく見てみよう。

内的感官は、我々自身をも、我々が自らに対し現象する通りにしか意識に描出せず[...]それはつまり、我々が自らを直観するのは、我々が内的に触発される通りにしか直観しないからである。(B152f.)

この記述に基づき“自己”の現象と自己直観、そして自己触発の関係を整理すると次のようになろう。まず自らへと注意を向け、さらに心の内に存する多様の諸直観を措定し、捉える一連の流れの中で、「心の変様」(A99)が生じる。もちろん「心の変様」は、外的認識に際しても(外界の諸事物からの触発を通じて)生じる(vgl. A19/ B33)。しかし、自己認識が外的認識から区別される決定的な点は、この「心の変様」の生じ方にある。自己認識の場合、主観自身が自らを触発することにより、眼前にある諸事物に限らず、あらゆる表象を(それが意識的連関を有する限りにおいて)任意に、つまり我々が自らを触発する通りに直観し得る。これが、内的に触発される通りに“自己”が現象するということである²⁵。

ただし自らとの意識的連関を有する諸表象を脈絡なく捉えるだけでは、いまだ自己認識は成立しない。内的感官において措定された自己直観は、時間という内的感官の形式をその根底にもつ(vgl. B157 Anm.)。この時間とは、「我々の内的状態における諸表象の関係を規定する」(A33/ B50)形式である。自己認識が「我々自身の現実存在の時間における規定」であれば、そこには時間規定が要請される。我々が任意に捉え出した諸表象を秩序づけるにあたり機能するのが、B版「演繹論」において「構想力の超越論的総合」という名にもとで導出される自己触発である(vgl. B153f.)。「我々が現象の多様を把捉するのは、いつでも継起的であり、それゆえ常に転変する」(A182/B225)以上、「たんなる知覚を通じては、相互に継起する諸表象の客観的な関係はあくまで規定されないまま」(B233f.)である。ここに「時間秩序 Zeitordnung」(A145/B185)が、「諸現象の継起的系列」(B247)に関わるところの原因性のカテゴリーに基づく「把捉の総合」(B246)により与えられることで時間規定が施される²⁶。この段階において、少なくとも定義上は“自己”認識

24 KrVにおける「自己触発」の問題は主に二つの箇所(ひとつは現在触れている「一般的注解」であり、いまひとつはB版「演繹論」の§24)で論じられている。この二つのテキストにおける自己触発を同一の働きとしてみなすか否か、といった問題をはじめ、自己触発の議論は非常に錯綜した内容をもつが、紙幅の都合上、自己触発の問題についてここで深入りすることはせず、今回は必要最低限の議論に絞って言及する(詳しくは、尾崎(2020)を参照)。

25 なお「一般的注解」(vgl. B69)において、「客観が感性を触発する仕方」が「客観が現象する仕方」と換言される点からも、自己触発という仕方が自己認識における客観、すなわち自己の現象の仕方であると解釈できよう。

26 もちろん、構想力の超越論的総合による時間規定は、時間秩序を付与するのみならず、むしろ経験的認識一般は、「時間系列」、「時間内容」、「時間総括」(A145/B185)といった、諸カテゴリーに基づく時間規定が

が成立するはずである。

(4)現象する“自己”の認識と私の現存在の規定としての自己認識

しかしここで次のような疑問が生じる。すなわち、以上で示してきた現象する“自己”の認識は、自らの経験(外的認識)をいわば再構成することと変わらないのではないか。またそれは、どのような点において〈私の現存在の規定〉としての自己認識から区別されるのか。最後にこの点について触れておきたい。手がかりは、自己認識が遂行される際の意識のあり方にある。すでに指摘した通り、自己認識は自己反省的な意識構造において遂行され、加えて、こうした反省も「私は考える」という自己意識の働きに基づくことから、反省されるべき自己とは、当の意識の働きを通じて与えられる存在意識であった。

自らの経験的認識を再構成する場合(現象する“自己”の認識)も、たしかにそれは「私は考える」という自己意識(「私は考える」)の働きに基づく。ただしその際、明示的に意識されるのは、この働きを通じて生じる存在意識(自己)ではなく、再構成された経験内容の方であり、件の存在意識はこの経験内容に(非明示的に)伴うかたちで、当の意識内容の後景に退く²⁷。他方、自らの現存在を規定するという意味での自己認識を遂行する場合、意識のスポットは、(自己認識を遂行するにあたり働く)意識作用を通じて生じる自己(存在意識)の方に当てられ、こうした存在意識への注意を伴いながら、当の存在意識との連関をもつ諸表象をもとに経験的認識が再構成される。その際、今度は具体的な経験内容の方が、この存在意識をいわばその背後から具体的に照らす²⁸。ここにおいてはじめて、いかなる規定をも伴わなかった存在意識(「私は存在する」)、すなわち自己は、外界の事物の諸表象との連関の内に、具体的な規定を帯びて明示的に意識され(「私はしかじかのように存在する」)、個別具体的な自己が認識されるに至る。

おわりに

以上、本稿はカントの自己認識論を究明するにあたり、従来看過されるきらいのあった自己認

複層的に織り合さって形成されるはずである。ただし本稿では、自己が現象するという事態を、自己触発によって惹き起こされた「心の変様」として捉えており、また「心の変様」として内的感官に属する諸表象が認識を構成するには、それらは時間において「ことごとく秩序付けられ、結合され、関係づけられなければならない」とされる点(A98f.)に着目し、自己認識における時間規定を、主に時間秩序という観点から説明した。

27 たとえば〈昨日の出来事を思い起こす〉ということも、「私は考える」という意識作用に基づき遂行されるが、こうした意識作用を通じて生じる存在意識(自己)が、現に思い起こしている意識内容の一要素として明示的に入り込むことはないだろう。ただし、こうした一連の再構成に際し、この存在意識が非明示的ではあれ伴い得るからこそ、自らの経験の再構成という事態そのものが主観との意識的連関を有し、その結果、当の再構成の事態が(たとえば、私はさっき昨日の出来事を思い起こしていた、といった仕方)新たな経験内容として捉え直されることも可能となる。

28 上と同様、〈昨日の出来事を思い起こす〉に際しても、〈自分が昨日どこにいたか／何をしたか〉が関心事となる場合には、意識のスポットが当てられている自己(存在意識)がいわば舞台の中心にあり、昨日の諸々の出来事はその背後から当の自己を規定する背景となる。

識に内在する構造上の困難さを明らかにしつつ、自己意識と自己認識との差異を示した上で、自己意識において意識される自己の内実との連関から自己認識において認識される自己の内実を検討した。本稿はまず自我を、一方では、論理的な主語として用いられるにすぎない空虚な概念と位置づけたが、他方で、統覚、すなわち自己意識の自発性の作用に着目するならば、自我には活動としての実在が認められることを明らかにした。この実在の意識こそ、自己意識において意識される内実、すなわち、反省される自己を前提としない、前反省的な存在意識である。また、この自己意識を活動とその存在とに区別すれば、前者は自我という概念に、後者は自己という概念に相当する。もちろん、活動と存在とは同一の事態について(説明上)区別された二つの側面である。それゆえ、活動はまさにその働きにおいて存在し、逆に存在は活動というあり方においてのみ存在すると解釈できよう。

次いで自己認識の議論では、自我はそもそも現象として認識されるような自己としては想定されない点を確認したうえで、認識主観との意識的連関を有した諸表象こそが現象する“自己”の内実であることを明らかにした。そこで本稿は、(主観の)現存在の時間における規定を、カントの自己認識概念の解釈の糸口とし、自己意識の働きを通じて生じる自己(存在意識)への反省的な意識構造を、自己認識の遂行における重要な契機として注目した。もちろんここでも自己は自己認識の遂行に先立ち与えられているのではなく、自らを反省する際の意識の働きを通じて同時に与えられる存在意識である。こうした存在意識への反省を伴いつつ、自らの経験した(もしくは経験しつつある)内容が再構成されるとき、未規定的な存在意識は具体的な規定を帯びる。前反省的かつ未規定的な存在意識か、それとも反省を通じて具体的に規定された存在意識かという点において、自己意識と自己認識とにおける自己は異なる内実をもつが、自己意識において自己が前提されなかったのと同様、自己認識においても自己は前提されない。むしろ、自己意識における自己が、自己意識の働きの中で与えられる存在意識であったのと同様、自己認識における自己も、自己認識の遂行を通じて具体的に規定される存在意識なのである。

【参考文献】

- ・ Allison, Henry (2015), *Kant's Transcendental Deduction: An Analytical-Historical Commentary*, Oxford University Press.
- ・ Choi, So-In (1996), *Selbstbewusstsein und Selbstanschauung: Eine Reflexion über Einheit und Entzweiung des Subjekts in Kants "Opus postumum"*, Walter de Gruyter.
- ・ Crone, Katja (2007), „Vorbegriffliches Selbstbewusstsein bei Kant?“, *Kant in der Gegenwart*, Jürgen Stolzenberg (hrsg.), Walter de Gruyter, S. 149-165.
- ・ Forgone, Luca (2019), *Kant and the Problem of Self-Knowledge*, Routledge.
- ・ Frank, Manfred (2007), „Kant über Selbstbewusstsein“, *Auswege aus dem deutschen Idealismus*, Suhrkamp Verl., S. 183-193.
- ・ Heidemann, Ingeborg (1958), *Spontaneität und Zeitlichkeit: Ein Problem der Kritik der reinen Vernunft*, Kölner Universitäts Verl.
- ・ Heimsoeth, Heinz (1956), „Persönlichkeitsbewußtsein und Ding an sich in der Kantischen Philosophie“, *Studien zur Philosophie Immanuel Kants: Metaphysische Ursprünge und Ontologische Grundlagen (Kant-Studien Ergänzungshefte Bd. 71)*, Kölner Universitäts Verlag, S. 229-257.
- ・ Klemme, Heiner (1996), *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis*, Felix Meiner Verl.

- ・ Kraus, Katharina (2020), *Kant on Self-Knowledge and Self-Formation: The Nature of Inner Experience*, Cambridge University Press.
- ・ Longuenesse, Béatrice (2019), *I, Me, Mine: Back to Kant, and Back Again* (pbk., first published in 2017), Oxford University Press.
- ・ Makkreel, Rudolf (2014), “Self-cognition and self-assessment”, *Kant’s Lectures on Anthropology*, Alix Cohen (ed.), Cambridge University Press, pp. 18-37.
- ・ Melnick, Arthur (2010), *Kant’s Theory of the Self* (pbk., first published in 2009), Routledge.
- ・ Rosefeldt, Tobias (1998), „Wer oder was ist „das stehende und bleibende Ich“?“, *Immanuel Kant: Kritik der reinen Vernunft*, Georg Mohr und Marcus Willaschek (hrsg.), Akademie Verl., S. 436-442.
- ・ Schmitz, Friederike (2013), “On Kant’s Conception of Inner Sense: Self-Affection by the Understanding”, *European Journal of Philosophy*, vol. 23, n.4, pp.1044-63.
- ・ Willaschek, Marcus et al.(hrsg.) (2015), *Kant-Lexikon*, Bd. 3, Walter de Gruyter.
- ・ 尾崎賛美(2020)、「カント自己認識論における自己触発—注意作用に着目して—」、日本哲学会web論文集『哲学の門：大学院生研究論集』第2号、日本哲学会、75-89頁。
- ・ 中野裕考(2021)、『カントの自己触発論 行為からはじまる知覚』、東京大学出版会。

*本稿は、平成31年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号：19J10697)による成果の一部である。